

ハナノキ観察

飯山満駅(東葉高速線)と消防署を繋ぐ道はハナノキの並木になっています。3月19日に車からハナノキが赤く花開いているのが見えました。改めて薬園台(新京成線)の駅広場に植栽されているハナノキの写真を撮りに行くことにしました。雄花は枝先に数個束生し、花自体は小さいのですが数個あつまって咲くので遠目でも真っ赤な花がよく目立ちます。3/21には葯から花粉が見え始めていました。(右の写真)



(雄花：3/21 葯から白い花粉が見える)

ハナノキは日本の固有種で、長野県南部・岐阜県南部・愛知県北東部の3県県境のおもに木曾川流域の山間湿地に自生し、長野県大町市の居谷里湿原に隔離分布するそうです。

ハナノキは4,500万年くらい前から北米で出現したとされています。その後、第三紀の温暖期に北半球の高緯度地域にまで広く分布ひろげ、1,000万年前頃には、北半球の中緯度地方を中心にユーラシア大陸、北米に広く分布していました。しかし、繰り返された氷河期の影響で500万年前にはヨーロッパではハナノキ節の仲間は絶滅し、現在、生き残っているハナノキ節の樹木は3種だけとなり、北アメリカ東部に2種(Red mapleとSilver maple)と日本の1種だけが分布するのみとなった。



(雌花：3月21日 3月28日 4月7日 4月23日)

ハナノキ (*Acer pycnanthum*) はムクロジ科カエデ属ハナノキ節に属する雌雄異株の落葉高木。時間的に雌花の様子を追ってみました。3/21には、雌花は二本の柱頭が見えていますが花柄はまだ伸びていません。3/28には花柄が少し伸び始めています。4/7には花柄はだいぶ長くなり、若い果実が見え始めています。4/23果実(翼果)が大きくなり、花柄や果実は赤色から緑に変わっています。花が終わると葉が出てきますが、やはり始めは赤い色だったのが緑になっていました。アントシアニンが太陽光のフィルターとなって、強い太陽光の光酸素障害から身を守っているのではと推測されます。葉は対生、浅く3裂するが、時に切れ込みの無いものもあります。後に裏面が粉白色となるが若葉ではわかりづらい。

種子は約1ヶ月半で成熟し、5月下旬に散布されます。多くのカエデ属では、種子が秋に散布されるのに対して、ハナノキ節の3種は初夏に種子を落下させるのが特徴です。種子は散布時に休眠状態にあり、冷湿状態で3ヶ月以上経過しないと休眠が解除されず翌春まで発芽出来ません。その間、種子が死亡する危険性が秋散布種子より高く、とくに野ネズミ類による食害にあいやすく、初夏の種子散布は、実生の発生には不利な特性となっている様です。

船橋市・林信子

水棲昆虫の代表：ゲンゴロウ

<出会い>

ゲンゴロウと初めて出会ったのは小学5年（50年以上も前）の8月で、灯火に飛来したものでした。

当時は、ゲンゴロウの生態について詳細に書かれているものがなく、「昆虫の生態図鑑（矢島 稔著）」が唯一の参考書でした。飼育ケースの中で見せてくれる行動は驚きの連続でした。この個体は、冬を2回越して3年生きました。この個体と過ごした3年でゲンゴロウの生態（習性）が明らかになり、自分なりの飼育繁殖の方法を確立することに繋がりました。

<飼育で分かった生態（習性）>

1. 動きの早い生き物は苦手

水中に適した体で素早く泳ぎますが、前足が短いので動きの早い生き物（魚、エビ）を捕えることができません。動きの鈍い生き物（ヤゴ、水面に落下した虫）や死んだ魚などを食べます。飼育では二ボシを中心に与えていました。

2. 甲羅干しが不可欠

水中から出て甲羅干し（体を乾かす）を盛んにします、これをしないと体中に白いカビのようなものがつきまです。飼育を開始して一ヶ月ほど経ったころ、体に白いカビのような（白い藻のような）ものがたくさんついていてのを見つけました。ピンセットや綿棒で取ろうとしましたが個体が暴れるためうまくできません。次に観賞魚用の殺菌液を入れましたがこれも効果がありませんでした。図鑑に「ゲンゴロウは、陸上で生活していたものが水中に生活の場を求めて進化したものだ」ということが書かれていたことを思い出し、陸上の生活の名残があり、水中から出て陸地でカメのように甲羅干しをするのでは？と思いました。そこで試しに甲羅干しをする陸地として発泡スチロールの板を浮かべたところ、ゲンゴロウは、すぐにスチロールの板に上り甲羅干しを始めました。すると、体中にあった白いカビのようなものは綺麗になりました。この出来事に私は、**自然の力の偉大さと神秘を感じました。**

3. 省エネルギーの生活をする

甲羅干しをする陸地として浮かべた発泡スチロールの板ですが、この板の下がゲンゴロウのお気に入りの場所になりました。

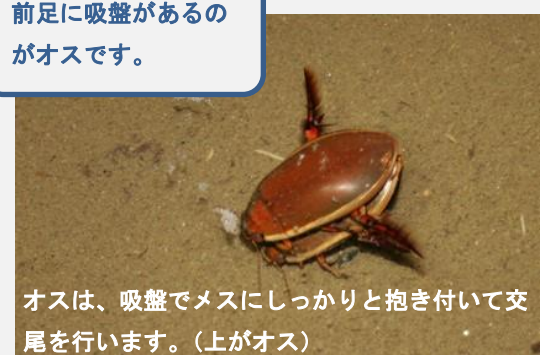
ゲンゴロウと話して聞いたわけではありませんが、底で体が浮かないように足で物につかまっているより、体を他のもの預けているほうが楽なのだと思います。また水面直下なので呼吸するための移動も少なくてすみま



正面から見たゲンゴロウ、「とぼけた顔」と名前（源五郎）に親しみを感じます。



光が当たると明るい緑色に輝きます、



オスは、吸盤でメスにしっかりと抱き付いて交尾を行います。（上がオス）

交尾は、3月から盛んに行われますが、産卵は、5月中旬以降に行われます。



甲羅干しを行う

水中から上りやすいように傾斜をつけました



す。水上からは姿が見えないため天敵から襲われることもない絶好の隠れ家となるのです。

4. 低温に強い

なるべく自然の状態で飼育しようと思い、屋外で冬越しさせることにしました。冬は、水底の物陰に隠れて過ごします。ある日、様子を見に行くと水面に氷が張っていてその中に閉じこめられていました。この姿を見たときは、死んでいると思いとても気持ちが暗くなり落ち込みました。しかし、時間が経ち氷がとけると元気よく泳ぎだしました。底に潜っていく姿を見て飛び上がって喜びました（笑）。

5. 人に慣れる

飼育して2年ほど経ったぐらいから私の姿を見るとエサをねだるようになりました。日中は物陰に隠れているのですが、私の姿を見ると水面に出てきてぐるぐると泳ぎ回ります。シラスポシを与えるとお尻の先を水面に出しながらおいしそうに食べました。食べ終わるとまた水面から口を出してぐるぐると泳ぎ回るのでシラスポシを与えました。警戒することなく私の手から直接エサを食べるなんて夢のような出来事でした。

飼育下で、「ミズカマキリ」と「コオイムシ」が、上記同様にエサのおねだりするのを確認しています。



氷に閉じこめられても耐えられます！



飼育しているとコオイムシ、ミズカマキリも、人影をみると餌をおねだりするようになります。

西野 孝法（千葉市）

<エピソード：田んぼの怪獣の正体>

小学生のころ、毎日右手に網、左手にバケツ、肩から虫かごのスタイルでムシを追いかけていて目にするもの全てを捕らえては飼っていました。

しかし、どうしても恐ろしくて手が出なかった（探らなかつた）生き物がいました。その生き物は、田んぼの中で、太くて長い尻尾を水面に出していました。その尻尾にはたくさんの毛が生えていて、しかも一定のリズムで「ドク、ドク・・・」と収縮を繰り返していました。頭の方は泥に紛れていて良くわかりませんでした。勇気を出して網でつつくと、目に止まらぬ素早い動きで泥の中に姿を消しました。私は、この得体の知れない生き物を「田んぼの怪獣」と呼ぶことにしました。

この時から約20年後、ゲンゴロウの繁殖に成功したときに、「田んぼの怪獣」の正体が、ゲンゴロウの幼虫だったことが分かりました。



怪獣の正体は、ゲンゴロウの幼虫だった。



終齢（3齢）幼虫の大きさは約80ミリに達します。

尻尾の先を水面に出して呼吸します

身長1Mぐらいだった私には、とてつもなく大きく感じました

初めて見る虫は南方系？

2011年5月、国立駅前大学通りを歩いていたら、昆虫生態園でみたオオゴマダラのようなチョウが飛んでいた。とても優雅に飛んでいて素敵だなと…。後に知人に聞いたところ、誰かが放蝶して増えてしまったアカボシゴマダラの春型と教えてもらった。2015年8月には加曽利貝塚で初めてアカボシゴマダラを見た。それからはあちこちで見えるようになった。道路脇に生えた小さなエノキの枝にある蛹の抜け殻を見た時は、そのたくましさにびっくりした。(2018年1月に特定外来生物に指定された。)2008年11月クロコノマチョウを初めて庭で見たが、今は谷津田や公園で普通に見られる。庭のミカンの葉を食べるのはナミアゲハ・クロアゲハの幼虫だったのが、2009年にナガサキアゲハの幼虫が加わった。ナガサキの名前の通り1995年8月刷発行『日本のチョウ』の図鑑での分布は近畿以西だった。いつからかカラタチトビハムシがミカンの葉を荒らすようになった。2018年に加曽利で初めてキマダラカメムシ見たと思ったら、あちこちの公園や自宅でもみられるようになった。昨年9月にはベランダにクロマダラソテツジジミが来ていた。このようにはじめて見る虫も増える一方で消えていく虫もいるのでは…と感じている。



松本 美千代 (千葉市)

オトシブミのゆりかご

5月の雑木林を歩くと新緑「フィトンチッド」を体一杯浴びることができて気持ちがいい。そしてよく観られるのが「おとしぶみのゆりかご」だ。吊り下げられたり、落ちていたりする。3~5mm位の小さな虫「オトシブミの仲間」たちの仕業だ。運がよければ、自分の身体より何倍もあるゆりかごを作っている姿も見ることができる。日本のオトシブミの仲間は21種類位。種類ごとに作る葉っぱの種類や形が違い、「ゆりかご」をみて種類を想像するのも面白い。

オトシブミのメスは、葉の上を歩き、大きさや硬さを丹念に調べ、切ったり、折り曲げたりしてゆりかごを作り、その中に卵を産む。卵は敵に襲われることなく、母虫の思いがこもったゆりかごの葉っぱを食べて育つ。自然観察でゆりかごを開き、中の卵を観たあと、同じように巻き戻せなくて輪ゴムで止めたことがある(-_-) 小さな体で、一生懸命ゆりかご作りをしている母虫の姿は、何度観ても感動する。

母虫の愛むなしく、ゆりかごにハチやハエが卵を産み付け、オトシブミが育たないこともあるそうだ。

山下美佐子 (東金市)



期間限定 春の桜フェア

小坂 裕子

桜前線が近づくと、テレビでは桜の話題が続き、お店のメニューは桜フェアのお料理が美味しそう。ケーキ屋さんも期間限定の桜ケーキが並びます。満開になるころは、日差しも暖かく、外遊びが気持ちよくて、子どもたちは何時間でも飽きずに外で遊びます。

この季節は、子どもの遊びも期間限定の桜フェア。

子どもたちから

「おいしいご飯が、できましたので、いらしてください♪」と、連日、ソメイヨシノの木の下での砂場のテーブルに用意された桜の花びらで飾られたご馳走を頂きます。材料は桜の花びらと砂と土と水だけなのにバラエティーに富んだメニューが並びます。子どもたちが好きな木を投票したらソメイヨシノが一位になるのではないのでしょうか、外遊びが心地よくなる季節、虫の気配を感じながら満開の桜を眺め、花の後は赤い実を集め、熟せば色水作り、デコボコ・しわしわの幹には何か生き物が潜んでいるようで、探偵のようにデコボコの間隙を覗いたり、一年中遊び相手をしてくれるソメイヨシノです。

＊ サクラフェア ＊ 期間限定のたのしいお遊び



桜吹雪が舞いだすと園庭のあちこちには花びらの渦巻きが現れ、追いつくとスーッと消えて、少し離れたところに、また渦巻きが……。サクラの妖精の悪戯か、子どもたちに追いかけてもらうのを楽しんでいるようで、毎年不思議な光景です。

＊ 3〜6才の子どもたちとの実際にあった出来事をイラストにしています。

写真は押し花(ソメイヨシノ、矢車草等)